

趣味を通じた生きがいづくり

十人十色

Vol.9

カバディ

人間が内に秘める熱を解き放つ

守備時、味方の1人が攻撃手の足を掴んだタイミングに合わせて全員で囲む



——口野さんはインド発祥のスポーツ「カバディ」をされているようですが、興味を持たれたきっかけは何ですか。

昨今カバディを始めた選手の多くと同様、インターネットで連載中の漫画『灼熱カバディ』がきっかけです。その後、偶然にも取引先に在籍していたカバディ女子日本代表の主将と出会い、体験会に参加してチームに加入しました。

——カバディとは、どのようなスポーツですか。

競技は7人対7人で行われ、攻撃はコート内で1人が複数に対峙し、相手を触って自分のコートに帰れば、触った人数分が得点となります。一方守備は、タックルや取り囲むなどして、攻撃手を相手のコートに帰さないように捉えれば得点となり、それを交互に繰り返します。ワールドカップやアジア競技大会の正式種目であり、アジアを中心に欧米の一部でも親しまれています。

——日本での競技人口はどのくらいですか。

競技人口は400人程度で、全日本選手権大会をはじめ、年間7つの大会が開催されています。チーム数は約30で、男女比は8:2程度です。発祥の地インドではプロチームもあり、日本人選手も数名が参戦していますが、ほとんどの選手は学業や仕事のかたわらに競技しています。

——口野さんはどこで競技されているのですか。

もともと「カバディ協会愛知支部」にあるチームに所属していましたが、仕事で東京に転勤になってからは「東京レイズ」に所属しています。東京レイズは学生・社会人問わず広くプレイヤーへの門戸を開いているチームで、現在週1~2回活動しています。

口野 透 さん

会社員

【くちの・とある】1989年愛知県名古屋市出身。2017年、27歳の時にカバディと出会い、2018年には「第15回西日本カバディ選手権大会」で優勝。2018年に開催されたカバディの大会のうち社会人が参加可能な大会のすべてに出場した経験をもつ。



味方に合わせ、攻撃手を囲みに行くも失敗



——カバディに対する周囲の方の反応はいかがですか。

まずは「カバディ…カバディ…」と言ってプレーするあのカバディ?という冷やかな反応

が多いです。その後プレー動画を見せると、動きの激しさに目を奪われ、競技の価値観が大きく変わると言われます。

——口野さんはカバディを始められて何が変わりましたか。

「学生と対等に戦いたい!」という気持ちが芽生えたことから、都内で屈指のハードさを誇るスポーツジムに通うようになって、身体づくりはもちろん、意識も含めて今まで以上に健康的に過ごしています。またスポーツの特性上、勝負強さを磨く場面が多いため、仕事で重圧のかかる場面も、少しずつ楽しめるようになりました。

——カバディの面白さ、魅力とは何ですか。

自分がイメージした動きを自由に表現できるところです。長い歴史の中で洗練されたセオリーもありますが、「相手を触る・倒す」というシンプルな結果に直結すればどんな動きもできる、自由度の高さが魅力です。

——口野さんにとってカバディはどのような存在ですか。

カバディは、人間が内に秘める熱を解き放つ場所として、楽しさ、という気持ちをぶつける存在である一方、学びの場として捉えても面白い存在と考えています。2018年アジア競技大会日本代表・菊地拓也選手がインタビューで語った「人と人とが触れ合うからこそ、人の痛みや力加減、思いやる心を学ぶことができる」との言葉にいたく共感しました。「接触したか、しないか」は審判でも判定が難しい場面が多く、その場合は選手の品性に委ねられます。競技の激しさの中で誠実さも同様に養うことができるなど、人間性の教本としての側面もあると捉えています。

——今後カバディとはどのように関わっていきたいですか。

プレイヤーとしては50歳を超えても試合に出ておられる諸先輩に負けまいと続けたいと思っています。また、2026年に愛知県で開催されるアジア競技大会に向け、愛知も含めた地方へのカバディ普及の一翼を担えるようになることができればと思っています。